

★ 大人になれなかった弟たちに……  
テスト対策にも使えるポイント集！

名前

一年組番

○この物語は、

作者である米倉斉加年の自伝的な物語である。

ここでのポイントは、

①登場人物が置かれた状況を知ること

②登場人物の行動や風景の描写を基に心情を捉えること

この二つである。

○登場人物の置かれた状況(いつ・どこ・だれ)

時代は「一つの花」や「ちいちゃんのかげおくり」等と同じ、終戦の年とその前年です。

場所は、テキストに「福岡から南へ二十キロくらい行った、石釜」とあります。

福岡は一九四五(S20)年六月十九～二十日に空襲を受け、死者・行方不明者が千人を越える被害を受けました。

主人公一家は既に疎開していたので、被害をまぬがれています。

戦時中ですから、「一つの花」のゆみ子のように、いつも主人公はひもじい思いをしていたことが、物語の最初の方に書いてあります。

## ○登場人物の心情

「悲しい」とか「うれしい」といった登場人物の心情が直接書かれることはあまりありません。物語に書かれた行動や風景をもとに、登場人物の心情を読み取る必要があります。

「行動や風景」が書かれているところに表現技法が使ってあれば、そこが読者に気をつけて読んでほしいところなのです。

それぞれの場面での表現技法に気をつけて、登場人物の心情を考えていきましよう。

## ○ヒロユキのミルク

ミルクに対する「僕」と母の気持ちは、反復法と省略法、倒置法によって語られます。

○ミルクが一缶、それがヒロユキの大切な大切な（反復法）食べ物でした……（省略法）。

○甘いものはぜんぜんなかったのです。くお菓子はなんにもないころなのです。（反復法）

○甘い甘い（反復法）弟のミルク

○母は、よく言いました。ミルクはヒロユキのご飯だから、ヒロユキはそれしか食べられないのだからと——。（倒置法・省略法）

○それも、何回も……（省略法）。

○僕は弟がかわいくてかわいくて（反復法）しかたがなかったのですが、……（省略法）それなのに飲んでしまいました。

「僕」にとって甘い物がとても魅力的だったこと、いけないとわかっているも飲んでしまう「僕」の気持ちと、それを止めさせたいが、「僕」の気持ちがあわかって「ダメ」と言えない母の気持ちが伝わってきますね。

省略法とは、——（ダッシュ）や……（リーダー）などを用いた、文を簡潔にして、その文に込められた登場人物や作者の気持ちなどを読者に感じ取らせようとする表現技法です。

この「大人になれなかった弟たちに……」は、題名もそうですが、省略法がとてもたくさん使われています。特にこの場面でたくさん使われています。

1 ミルクが一缶、それがヒロユキの大切な食べ物でした……。

2 ミルクはヒロユキのご飯だから、ヒロユキはそれしか食べられないのだからと——。

3 それも、何回も……。

4 ……それなのに飲んでしまいました。

1からは、それはわかってはいたんだけど、でもがまんができなかったという「僕」の苦しい気持ちが伝わってきます。

2は、お母さんは「ミルクはヒロユキのご飯だから」「ヒロユキはそれしか食べられないのだから」と言ったわけで、「僕」に「ミルクを飲んではいけません」という部分が省略されています。つまり、お母さんは「僕」の気持ちもよくわかっていたので、「ミルクを飲んではいけません」とまでは言えなかったのですね。

3は、「飲んでしまった」という部分にこめられた、悲しさや後悔が入り混じった気持ちがかめられていて、また「何回も、何回も、何回も……」と数え切れないほど飲んでしまった意味もこめられているように感じます。

4は、「……」によって間（ま）が生じます。この間には「僕」の「その時はどうしようもなかった」という深い悲しみや後悔がかめられているように感じます。

## ○母の顔

親戚の家へ疎開の相談に言った時の母を、「僕」はどのように感じたのでしょうか。これを説明する段落の中で「顔」という言葉が五か所も出てきます。

「僕」の印象に強く残っているのは、

・そのときの顔なのです。

「その」が指示する内容は、親戚の人に「うちに食べ物はない」と言われるなり、「帰ろう」と言って、くるりと後ろを向いたときの顔でしょう。

その顔は

強い顔・悲しい悲しい顔・美しい顔

でした。

自分だけで子どもたちを守ろうとする「強い顔」、頼る者がいない悲しさが表れている「悲しい悲しい顔」ですね。そんな「僕たち子供を必死で守ってくれる母の顔は、美しい」と感じたのです。

この段落の最初と最後に、そんな母の顔を、

僕は今でも忘れません。

いつも胸がいっぱいになります。

と書き、「僕」はその後何度も思い出していることがわかります。

## ○母の涙

ヒロユキが亡くなり、「僕」と母は家へ帰ります。

空は高く高く住んでいました。ブーンブーンという B29 の独特のエンジンの音がして、青空にきらきらと機体が美しく輝いています。道にも畑にも、人影はありませんでした。歩いているのは三人だけです。

これは情景描写で、「僕」の気持ちを表現しています。

B29 の不気味なエンジン音や、青空に光る無機質な機体の色、そして自分たち以外は誰もいない風景。

心にぽっかり穴のあいたような、空虚な気持ちが伝わってきます。

「三人だけ」と言い、ヒロユキも自分たちの仲間に入っています。「僕」にとってヒロユキが死んだことがまだ信じられないのです。

情景描写とは、登場人物や読者が眺めている風景を表現している文（地の文）のことです。

しかし、ただ風景を描いているだけではありません。登場人物の気持ち（感情）がその場の状況（景色）にこめられていることが多いようです。また起こることが暗示されることもあります。

○亡くなったヒロユキをおんぶして帰る場面です。

空は高く高く(反復法)青く澄んでいました。ブーンブーン(擬音語)というB29の独特のエンジンの音がして、青空にきらつきらつ(擬態語)と機体が美しく輝いています。道にも畑にも、人影はありませんでした。歩いているのは三人だけです。

高く高く澄んだ青空や、美しく輝く飛行機などの情景は、なんとなく読むと、とても美しいように感じられます。

しかし、本当に「僕」や母は、それを美しく感じていたのでしょうか。

本当は怖いはずのB29を「怖い」と感じる事ができなかった、心が麻痺した状態を示しているのだと思います。

ヒロユキは幸せだった。母と兄とお医者さん、看護婦さんにみとられて死んだのだから。(倒置法)空襲の爆撃で死ねば、みんなばらばらで死ぬから、もっとかわいそうだった。

倒置法では、最も言いたいことを最初に書きます。

では母は本当に「ヒロユキは幸せだった」と思っていたのでしょうか。

「子どもたちは自分が守らなければいけない」と強く思っていた母にとって、ヒロユキの死は受け入れられなかったのではないのでしょうか。

「ヒロユキは幸せだった」と自分に言い聞かせ、ヒロユキの命を守りきれなかった自分を納得させようとしていたのではないのでしょうか。

○この母の気持ちは、次の段落で崩壊します。

部屋を貸してくださっていた農家のおじいさんが、杉板を削って小さな小さな棺を作っていてくださいました。弟はその小さな小さな棺に、母と僕の手でねかされました。小さな弟でしたが、棺が小さすぎて入りませんでした（反復法）。

母が、大きくなっていたんだね、とヒロユキのひさを曲げて漢に入れました。そのとき、母は初めて泣きました。

反復法により、周囲の人々にとってヒロユキは小さかったことを強調し、最後に予想以上に大きく成長していたことを読者に印象づけています。

反復法とは、同じ語句や似た語句を繰り返し、リズムを生み出す表現技法です。

しかし、この文章ではもう少し高度な使い方をしています。

ここでは「小さな」が何回も繰り返されています。このことから、農家のおじいさんも含め、ヒロユキ君はとても小さいと、みんな思っていたことがわかります。

しかし、その小さなヒロユキ君のために作られた小さな棺桶に、ヒロユキ君は入りませんでした。ヒロユキ君は、みんなが思っていたより、ずっと大きかったのです。

それまで、ヒロユキ君を守ろうと必死で、ヒロユキ君が死んでしまっても「幸せだった」と自分に言い聞かせていたお母さんは「大きくなっていたんだね」と泣き出してしまいます。

ヒロユキ君は、栄養失調になっても、必死で生きて成長しようとしていたことに気づいたのでしょう。

……でも死んでしまった。せつなさ、つらさがあふれたお母さんの姿です。

この「小さな小さな」というように、二回繰り返す方法も、この文章にはたくさんあります。

## ○題名はなぜ「弟たちに……」なのか

作品中の「僕」に弟は一人しかいません。

「広島」「長崎」と漢字で書くと、「もみじまんじゅうかな?」「長崎ちゃんポン美味しいよね」と、さまざまな連想が生まれます。しかし「ヒロシマ」「ナガサキ」と書くとうでしよう。原爆を落とされた悲劇の町、という意味になりますね。

同じように「ヒロユキ」もカタカナで書くことにより、戦時中に栄養失調で死んでいった多くの子ども達すべてを表現したのだと思います。ですから題名には「たち」という複数形を用いたのだと思います。

戦争末期から戦後にかけて食糧不足の中、弱い者から栄養失調や病気（当時、薬も不足していました）で死んでいきました。

一番弱い者……それは乳幼児でしょう。

「……」の省略法には、どんな気持ちがあるのか、それは作品を読

んだ読者に任されていると思います。

ちなみに、原作の絵本には「母に捧ぐ」という言葉が添えられています。もしこの話が、作者の母親に捧げるものであるとするならば、「弟たちに・・・」の「に」にはどんな言葉が続くのでしょうか。

この作品は、栄養失調で亡くなった子ども達への鎮魂歌（レクイエム）のような気がしますね。

## ○なぜ「ヒロユキ」とカタカナで表記されているのか

先に説明したように、特別な意味があることを強調するためです。

例えば「広島」と言えば、広島カープや厳島神社、広島風お好み焼きなど、さまざまなイメージがわきますね。ところが「ヒロシマ」と書いたらどうでしょう。一発で原爆が落ちた場所だ、と読者にはわかります。

では、「ヒロユキ」とカタカナで書くことで、作者はどんな意味を強調したかったのでしょうか。

「僕」の弟に象徴される「戦争中、栄養失調で死んでいった子ども達」を強調させたかったのだと思います。

## ○「顔」の反復表現

そのときの顔を、僕は今でも忘れません。強い顔でした。でも悲しい悲しい顔でした。僕はあんなに美しい顔を見たことはありません。僕たち子供を必死で守ってくれる母の顔は、美しいです。

この部分には「顔」という言葉が五回も使われています。読者の注意を喚起する反復表現です。それぞれの顔は以下の関係になります。

強い顔＋悲しい悲しい顔Ⅱ美しい顔Ⅱ母の顔

「強い顔」とは「子供を守ってくれる顔」です。

そして「悲しい悲しい顔」とは、誰にも頼らずに一人で命がけて守ろうとする顔」です。

この叙述の直前、親戚に「食べ物をお願いにきた」と誤解され、弁解せずに「くるりと後ろを向いて」帰ってしまいます。誰にも頼ることができないことを悟り、たった一人で子どもたちを守っていかなくてはいけないと決意した、強さと悲しさがあるのでしょうか。子供である「僕」は、それを「美しい母の顔」と感じたのです。

○「ヒロユキは幸せだった」と母は本当に思っていたか

思うはありますがありません。

「子供を必死で守」ろうとした母親ですが、ヒロユキを守りきることができなかったのです。

そして「子供を守れなかった」という事実を一番受け入れることができなかったのは母親自身です。この言葉は、「『ちいちゃんのかげおくり』のうにひとりぼっちで死ぬよりずっとましだった」と、なんとか自分を納得させようとする言葉です。

ヒロユキの死を「自分のせいだ」と思って、それでも自分をなんとか納得させようとする言葉なのでしょう。そして納棺の時に、母親はヒロユキ自身が大きくなっていることに気づきます。

自分の中では「小さい」赤ちゃんで、自分が守ってやらなくては生きていくことができないと思っていた母親ですが、ヒロユキ自身もまた「生きよう、成長しよう」としていたことに気づき、ヒロユキの無念さを思っ初めて泣くのです。

## ○「忘れません」の意味

最後の一文は、次のようになっています。

僕はひもじかったことと、弟の死は一生忘れません。

ここには作者の強い意志が入っています。

「忘れられません」という表現と比べてみるとよくわかります。作者は「ひもじかったことと、弟が死んだことは絶対に忘れないぞ」と決意しているのです。

作者は、作中で「僕はあの子のことを思うと、いつも胸がいっぱいになります。」と述べています。「いつも」ということは、しょっちゅう疎開の相談に行った親戚の家でのことが思い出され、その都度母の思いが胸に迫ったのでしょう。

そしてそれは、すべての元凶である「戦争」に対する強い思いが込められた言葉に違いありません。